

# 屠畜の新規範

## 中国西部における「人と動物」と「人と人」

シンジルト（熊本大学）

これまで、人と動物との関係に関する人類学的な研究は、主に生きている動物との関係をめぐるものに限ってきた傾向がある。人による動物殺しに関する研究は皆無ではないが、主として供犠のような儀礼化された事象に止まっているといえよう。実際、人は、供犠に止まらず、また狩猟採集・牧畜・農耕といった生業の形態に囚われることなく、広範にわたって、家畜をはじめとする種々の動物を殺してきており、これからもそうしていくだろう。

動物を殺すという行為を根源的に止めることができないとすれば、問うべき課題は、その殺し方のほうである。特定の人間集団の動物殺しの仕方の良し悪しをめぐって、集団内外の評価やその軋轢が、古今東西を問わず普遍的に存在してきたからである。また、こうした評価や軋轢は、特定の人間集団と動物との関係だけではなく、異なる人間集団同士の関係やその背後にある異なる観念同士の駆け引きをも代弁しているからである。

人による動物殺しにまつわる現象を複眼的に取り扱うことで、明示的に問題の焦点となる特定の人間集団と動物との関係自体だけではなく、現象の背後にある人と人との関係の存在を露わにすること、さらには、この人と人との関係がそれまでの特定な人と動物の关系到及ぼす影響を解き明かすことが可能である。特定の動物殺しのあり方の変化やそれを促す要因に着目し特定することが、人間自身のあり方とその動態の解明につながるのである。

多様な文化が共在する中国西部において牧畜は伝統的な生業の一つである。家畜は、多くの住民、とりわけ、牧畜民の生存にとって欠かせない糧となる。牧畜民の文化的多様性は、家畜を屠る方法の多様性にも反映されている。イスラム教が優勢を占める新疆ウイグル自治区牧畜地域のカザフ族などの中には家畜の気管、食道及び頸静脈を切断して「失血死」させるという方法がある。また、仏教が優勢を占める青海省アムド・チベット地域では、縄などで家畜の口を縛り付けて、「窒息死」させるという方法がある。そして、内モンゴル自治区などでは、ナイフで腹部を切り開き、指で心臓の肺動脈を掻き切って屠る「腹割き法」というものがある。

新疆や青海に暮らすモンゴル系の人たちは、「失血死」や「窒息死」といった屠畜方法を用いているため、いわゆるモンゴル伝統的な「腹割き法」の基準からみた場合、伝統離れになる。他方、当の人の

視点からみた場合、「腹割き法」のほうがむしろ残忍にうつる。このように、様々な地域的な特徴がみられるものの、共通にいえるのは、みな自分たちの屠畜の方法こそ家畜に優しく、その肉の味こそ最高だ、と確信しているという点である。つまり、屠畜の方法をめぐる評価には、様々な地域的な基準こそあったものの、それらを凌駕する規範はなかった。

21世紀に入り、それら在来の屠畜方法の良し悪しを測る超越的な規範があらわれた。動物福祉の思想に基づく規範である。この規範は、有機農業という経済政策の一環として欧米から導入されたものである。導入背景に、国際的には欧米の農産物輸入基準をクリアするため、国内的には東部内地の近代集約農業の一部門である家禽業がもたらした食の安全問題を克服するため、有機農業を推進させていくとの事情があった。

しかし、東部内地との比較において、長年、「後進地域」とされ、産業化の経験をもたず、いわば自然牧畜を営んできた中国西部牧畜地域に、なぜ、近代農業のオルターナティブとしての有機牧畜業を推し進め、特にその一環として動物福祉という思想を普及させるのか。その歴史的な必然性とは何か。

経済学的な発想のみでは理解し難いこの問いを考えるため、発表者は、動物福祉のなかでも、積極的に勧められている電撃などによる「安楽死」という屠畜方法に注目し、この方法が誕生した欧米の歴史において「人と動物」の関係と「人と人」の関係とが、いかに、相互に参照してきたのかに照らしながら、現在、この方法に付与されている「非人間中心主義」的な位置づけが、いかに、中国西部牧畜地域の「文化的多様性」の均質化につながろうとしているかを検討していきたい。

具体的には、中国西部における3つの在来の屠畜方法のあり方を概観し、有機牧畜業の展開に伴う動物福祉という思想の普及によって、3つの方法ともに「粗暴でかつ非衛生的な」ものとして倫理的にも科学的にも否められていくプロセスを分析することで、それらに取って代わろうとする「人道的でかつ衛生的な」電撃などによる安楽死という屠畜方法のもつ、歴史的政治的背景と効果を考える。

**キーワード** 中国西部、在来の屠畜方法、動物福祉、安楽死、文化的多様性